

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8

tel&fax 043-461-7004

～この春、何かを始めたいあなたへ～

“楽農家” 人生

私が畑に関わってからかれこれ 26 年になります。東京から宮ノ台へ越してきた時に東京では出来なかったこと、佐倉でならできるとは何だろうと考えました。そんなときに近所の友人が農家の方に掛け合ってくださいって広い畑を借りることが出来ました。1区画を 30 坪になるように区切り参加者を募集して「たがやす会」を作りました。多いときで 30 人ほどの仲間がいましたが 11 年でお返ししなければならなくなり、つてを頼って今の畑を借りることが出来ました。面積も少しずつ増えて現在は 3 人の地主さんから 200 坪ほどの土地を借りています。

“蒔かぬ種は生えぬ”といいますが小さな種を蒔いて芽が出て本葉が出て大きく育つのは本当に楽しいものです。締めくくりは出来た野菜を美味しく頂くことです。楽農家冥利に尽きます。しかし楽な仕事ばかりではありません。夏場の 6 ヶ月などは 1 週間も畑をほったらかしにしたら草が伸び放題になります。1日に 3 時間も 4 時間も草取りに夢中になることもあります。耕すのも初めは鍬を使ったりスコップを使ったりしましたが今では耕耘機を使っています（一部狭い畑はスコップで耕しています）。あぜ道一つ隔てた畑でも鍬が跳ね返ってくるほど固い土もありますので耕耘機はとても助かります。堆肥やもみ殻、チップなどをすきこんで柔らかい土を作るよう心がけています。

5 月の連休の頃には夏野菜の種を蒔いたり苗を植えたりします。ナス、トマト、きゅうりなど 30 種類以上の野菜を作ります。9 月になると冬野菜、11 月になると春に収穫する豆類などの種蒔きがあり年間通じて 50 種類以上の野菜を作っていると思います。6 月にはたまねぎとジャガイモの収穫になります。天候に左右される野菜作りです。農家の方には申し訳ありませんが出来ても出来なくても土に親しむ人生を楽しみたいと思います。

近頃では貸し農園も増えました。仲間が増えることはうれしいことです。（楽農家 R.Y）



～この春、何かを始めたいあなたへ～

「盆石」に魅せられて、幾十年

私の実家の前のお寺では、7月15日夏祭りの折、必ず「盆石展」が開かれていました。祭りの賑わいの傍らで、本堂横の一室に静かで美しい空間があり、数点のお盆石が飾られていました。子供心に美しいものだと毎年眺めていました。その下地があったのか、20歳前後から稽古を始めて数十年がたっています。

「盆石」とはおよそ70cm位の黒塗りの盆上に石と白砂を使って自然を描く、日本の伝統的な縮景芸術です。歴史は古く、足利時代、石庭を作る折のひな型として用いられ、床飾りとして茶道と共に発展してきました。

盆の上に形の良い石を山に見立てて配置し、さまざまな大きさの砂を駆使して川や海などを表現します。道具は鳥の羽根や、小さな箒、匙、ふるいなどを使って描きます。石や砂は何度でも繰り返し使うことができ、道具は親子間で使えるほど長く使用できます。

数十年私を引きつけてきた盆石の魅力は何か、時々考えることがあります。美しいと感じた四季折々の自然を盆上に取り込み、どう表現するか色々と考えるその過程が私は好きですね。またそれが出来上がった時の達成感もあります。白黒のコントラストのある美しい景は現代生活にもマッチし、モダンな和風空間が生まれ、リビングや玄関に飾って楽しむことができます。最近では旅行してもカメラにとって満足してしまう傾向がありますが、例えば波のうねりとか、川の流れ、風の動き、月の満ち欠け、等等自然を丁寧に見るようになると思います。

日本古来の「盆石」について、外国はもちろん、日本でもあまり知られていなくて残念に思います。最近では文化センターで講座を持ち、生徒さんに指導もしています。グローバルフェスタに参加したり、千葉市花の美術館で盆石展を開いたり、公民館で1日体験講座を催したりして普及活動に努めています。(美多賀鼻 千世)



「潮」

編集後記——天候不順な春でしたが、別れと出発の季節でもあります。今号は、それぞれの道のベテランの方にご寄稿いただきました。新しい自分に出会うためにお役立ていただければ幸いです。“楽農家”のYさんは宮ノ台にお住まいです。美多賀鼻さんは、細川流「銀沙の会・千葉」の代表として活躍され、去年はイタリアでの展示会にも参画、今年1月の花の美術館での作品展は好評でした。秋には銀座画廊で作品展を予定しています。菅沼さんからは早くより原稿頂いていながら、発行が一般公開より遅れてしまいました。ごめんなさい。

Kさんの福祉コーナーも再開しました。印刷・配布をお手伝い頂いている方々にも励まされ、街からの情報発信に努めたいと思います。ご意見、ご寄稿お待ちしております。(U)

グループホームに親戚を訪ねました

小田急線の駅の傍にあるグループホームに親戚の女性が入居している。それまでは、駅近くのアパートで1人暮らしをしていた。たまに会いに行ったが、軽い認知症があるように思われることもあった。しかし、自分ひとりで生活をしていて、ところが市の土地区画整理事業の区域にアパートが入ってしまい、立ち退きを余儀なくされた。そのころ認知症が少し進んでいたこともあり、優先的にアパートの近所のグループホームに入る事ができた。1人暮らしの時は、昔の話を良くしてくれ、私や私の家族のことも分かっていたが、施設に会いに行った時には、私のことも親しい人のことも忘れていた。だが、世間話は普通に話すし、冗談も言い、朗らかで、ちょっと見には認知症だとは気が付かない。92才になるのに自前の歯で、食欲もある。

「食事はおいしいし、お風呂にも入れてくれるし、とても良い所だから、あなた達もはいいなさいよ」と誘ってくれた。廊下には、外出時に撮った写真が沢山貼られていた。1人暮らしの不安や家事の煩わしさから解放され、幸福そうだった。過去の色々な事を忘れてしまった事も「頭がおかしくなっちゃったから」と笑いながら言い、それを苦にしているようには見えなかった。ここで、最期まで暮らせるといいのにと考えた。

しかし、ここでは看取りまではしないので、病気が進行したら、療養型医療施設→病院と移って行かなくてはならない。又、入居者が職員に支援されながら共同生活を行うというコンセプトなので、家事もできる事をする。そのため専門の調理担当者は居ない。結局、職員が当番制で作っているようだ。

近頃、夜間にグループホームが火事になり、犠牲者が多く出たというニュースをよく聞く。入居者9人に対し、夜勤の職員は1人でよい事になっているが、災害時に9人も誘導できるとは思えない。それならスプリンクラー等の防火設備を義務化すれば良いと思うが、消防法では、延べ床面積275㎡以上の施設だけにスプリンクラー設置を義務化している。3月27日付けの朝日新聞には厚生労働省がグループホームのスプリンクラー設置状況のサンプル調査を行った結果が報道されていた。無作為に2078施設を調査したところ、設置済は48.7%であった。設置していなかった51.3%のうち、49.8%は設置予定としている。入居者のためにも夜勤の職員のためにも速やかにグループホームのスプリンクラー設置を全施設に義務化してもらいたい。(K)

グループホームとは

介護保険法上地域密着型サービスのうち認知症対応型共同生活介護と呼ばれているもの。介護サービス費の支給について事業所の所在する市長村長の指定を受けることになっている。(指定地域密着型サービス事業者)。なお、グループホームのサービスを受けられる入居資格者は、65歳以上の年齢で要支援2(従来の要介護1)以上の認知症の人で、原則として市内在住者に限られている。

現在、佐倉市には、グループホームは6箇所あり、100人強が入居している。

菅沼正子の映画招待席 31

プレシャス

—無知は罪である—

信じられない。語るにも劣る悲惨な家庭環境。でもこれが現在のアメリカ。超リッチと超プア。アメリカンドリームがある一方で、貧民街で生まれ育った人々は、もがいてももがいても、そこから抜け出すことはできない。奇跡でも起きない限り。

1987年のニューヨーク、ハーレム。16歳の黒人少女プレシャス（ガボレイ・シディベ）。特大メタボな彼女はいまだに字が読めない。実父には3歳から性的虐待をうけ、いま2人目を妊娠中。4歳になる女の子はダウン症で祖母に預けているが、母親（モニーク）は「あたしの男を盗んだ」と口汚くののしる。母親の精神的虐待は日常的なもので、さらに召使いのようにこき使い、物を投げつけたり暴力までふるう。

親の願いを込めて「プレシャス」（宝物）と命名されたのだろうに、こんな不幸があるのだろうか。それでも彼女がこの家にとどまっているのは、彼女の優しさと母への思いやりなのだ、と私は思う。

なんという母親！とんでもない母親だと、だれもが思うだろう。たしかにとんでもない母親だけれど、私はこの母親の心の痛みはプレシャスの比ではない、と思うのだ。母親は日がななにもしない。絶望しているのだ。絶望しているからなにもできないのだ。ハーレムの人間はしょせんハーレムでしか生きられないということを、生涯学習として学んでしまったのだ。底辺の人間には自助努力ではどうにもならない社会のしくみがあるのだと。だから彼女は生活保護で暮らしている。それがいちばん手っ取り早いから。大きな体をソファで持て余しながら、食べて、寝て、TVをみて、コカインを吸って……。おそらく彼女は幼い頃から愛を知らずに育ったのだろう。だれからも愛されたことはなく、貧すれば鈍するで、品性までねじ曲がってしまった悲しい女である。

この役をコメディエンヌとして人気のモニークが度迫力で演じて、アカデミー賞をはじめ各地の賞レースを総なめにしているが、実に納得。彼女の存在感はすごい。暗い暗澹たる話だから、シリアスに演じられたらたまったものではない。見終わってみれば、後味がさわやかなのは、モニークのおかげだろう。それからプレシャスの夢や願望がファンタジーの映像で描かれるのも、しばし気分を和らげてくれる。

その後プレシャスは妊娠がバレて放校処分になる。校長の配慮でフリースクールに入学するが、これがプレシャスには奇跡の始まり。すばらしい先生と出会えたのだ。わけありの生徒ばかりのフリースクール。レイン先生（ポーラ・ハットン）は「教えるのが好きだから、ここにいるのよ」とまず読み書きを徹底して教える。私はここに教育の原点を見たような気がする。常々、「学びたい」気持が強かったプレシャスは、人はすべて平等であり、生きる価値があること、愛すること、愛されること、可能性はだれにでもあること等を学んでいく。しかし少女の成長物語というほど、この映画は単純ではない。貧困、福祉、医療、教育 etc、問題をいっぱい抱えて、この映画は奥が深い。（4月24日より公開）